



岐阜における南蘋派の広がり : 日比野鶴翁と弟子・鶴嶠の活動から

木下, 明日香

(Citation)

美術史論集, 14:117-127

(Issue Date)

2014

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81010455>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010455>



岐阜における南蘋派の広がり

―日比野鶴翁と弟子・鶴嶠の活動から―

《キーワード》山田鶴洲、鶴亭

木下 明日香

はじめに―先行研究

南蘋派とは江戸時代中期、沈南蘋（一六八二―）の来日を契機に生まれた鮮やかな色彩と繊細な筆法を特色とする画派で、諸大名に愛好者が多く、また、全国的に広がりを見せていた。美濃地方においても、京坂地方で活躍した鶴亭に学んだ山田鶴洲（一七四四―一八〇三）が帰郷し、南蘋派を弟子たちに伝えたため、山田鶴洲およびその弟子たちによる絵画作品が伝存している。この鶴亭と鶴洲の師弟関係は世間に知られていたらしく、『画乗要略』（白井華陽編、天保三年「一八三二」刊）でも紹介されている。

鶴洲が鶴亭の高弟であることは宮島新一氏の論考¹⁾によって明らかにされ、また、『黄檗―禅と美術』展図録（岐阜市歴史博物館、一九九二年）、および『花と鳥たちのパラダイス』展図録（神戸市立博物館、一九九三年）でも作品紹介中に簡単な略歴が紹介されている。

鶴洲とその弟子たちの活動については白水氏の論考²⁾に詳しいが、筆者は平成二十三年（二〇一一）六月に岐阜市歴史博物館での特集陳列「岐阜の南蘋派絵画」（平成二十三年六月二十四日―七月二十四日）を行うにあたり、岐阜市周辺の寺院において若干の調査を行った。本稿ではその調査内容の中から、日比野鶴翁と、その弟子鶴嶠に関する調査結果を述べるものである。

また、岐阜での特集陳列の後、『若芝と鶴亭』展図録（神戸市博物館、二〇一一年）でも鶴洲作品が紹介されており、鶴洲の存在は岐阜以外でも認知されている。

一、山田鶴洲とその弟子たち

岐阜での南蘋派の広まりは山田鶴洲の帰郷によってはじまる。この山田鶴洲と、「鶴」の字を受け継いだ三人の高弟・矢島鶴仙（一七五五―一八二六）、日比野鶴翁（一七六四―一八四七）、松波

鶴山（一七六九—一八五五）についての事蹟を白水氏の論考にそって再確認する。

籠大仏で著名な正法寺（岐阜市）に鶴洲の墓があり、その墓碑銘³によれば鶴洲は、幼少のころより絵画を好み、鶴亭の墨竹図を見て心動かされたため、師事することを熱望するようになるが、両親の反対にあい、成長したのち、両親に許されて鶴亭の門に入ることになった。老齢になっても画法は衰えることなく、故郷で、弟子をとって画法を教え、また、絵を請うものが多かったという。

鶴洲が帰郷したのは、天明四年（一七八四）頃と考えられている。この墓碑銘の末尾にある通り、この墓碑は七回忌にあたって弟子たちによって寄進されたもので、寄進者は先にあげた三名を含む十二名の弟子たちである。墓碑には弟子たちの氏名とともに居住地と思われる地名も記されており、弟子たちが現在の岐阜市内とその周辺部に広がっていたことがわかる。なお、岐阜市歴史博物館には鶴洲が「野子剛」という弟子のために描いた絵手本帖が所蔵され、墓碑銘に「各方 社中諸生」とあることから、かなりの数の弟子および孫弟子がいたものと考えられる。

墓碑銘の筆頭に名のある三人の弟子について簡単に述べると、まず、「鷺山 僧一円」とは、鷺山にある法光寺の僧で矢島一円といい、鶴仙と名乗った。墓碑銘の筆頭にあることから、鶴洲一門のまとめ役であった可能性も指摘されている。法光寺には、関羽像を鮮やかな色彩で描いた二曲一隻屏風と、墨と淡彩で描いた鶏図など六枚の絵が残されている。六枚の内でも、仙人と蝶を描いた作品は、寛政三年（一七九一）の年紀をもち、この頃にはすでに絵を描きは

じめていたことがわかる。

次に、「高田 日比野亮」は、養老郡高田の人で、名は清蔵、景亮、字は公明、鶴翁と号した。同時代の画史である『画乘要略』には、鶴亭の画系を継ぐ人物として、鶴洲、さらにその弟子として鶴翁が紹介されている。景陽寺（養老町）には、鶴翁の描いたとみられる襖絵八面が遺され、養老町の指定文化財となっている。金地に花鳥を色鮮やかに描く、迫力ある大画面作品である。このほか、養老町・室原にある井畑軸にも鶴翁の絵がのこされ、同じく町の指定文化財となっている。

松波鶴山は、加納本町の人で、松波文右衛門といい、邦章、慶翁などと号した。『加納町史』によれば、文政十年（一八二七）には庄屋役となり、天保六年（一八三五）に剃髪し、作画だけでなく、篆刻や俳諧などにも親しんでいた。加納宿の宿老で漢詩人の宮田嘯台とも親交があり、嘯台が鶴山の六十才を祝うために詠んだ詩が残されている。

二、景陽寺所蔵日比野鶴翁作品

この弟子たちのうち、日比野鶴翁と弟子たちの活動については未調査の部分が多かった。鶴翁の襖絵がある景陽寺における調査では、いくつかの新出作品も調査することができたので、この場にて紹介したい。

まず、以前より知られ、養老町の指定文化財⁴にもなっている花鳥図襖八面（図1）であるが、紙本金地着色の縦一八二・八cm、横

八七・二cmであり、現在は書院に柱をはさんで四面ずつ配置されているが、元は四面ずつL字型に配置され、本堂にあったという。上部八センチほど金箔が継がれた跡が見受けられる。落款・印章はなもの、景陽寺は鶴翁と縁の深い寺院であり、かつ、鶴翁の伝存作品も多く所蔵されていること、また、南蘋派に特徴的な綬帯鳥を鮮やかな色彩で描く手法等から、鶴翁以外の筆者を考えづらいことから、鶴翁筆とみなすのは妥当である。

大画面でもモチーフが破たんすることなく構成され、細部まで細やかに描きあげられており、鶴翁の代表作といっても過言ではない。松の枝にとまる綬帯鳥の描き方は、鶴翁筆「仏手柑に綬帯鳥図」(岐阜市歴史博物館所蔵)(図2)の綬帯鳥の形態とほぼ同じものである。なお、この鶴翁筆「仏手柑に綬帯鳥図」は、鶴洲の描いた「仏手柑に綬帯鳥図」(神戸市立博物館所蔵)に構図・モチーフがほぼ一致する。襖絵における松などの描きかたは南蘋派とはいいがたく、大画面の絵画を描くにあたり、鶴翁が師の鶴洲から受け継いだ技法やモチーフを使用しながらも、他の画派からも学習し、吸収していったことが読み取れる。

このほか、景陽寺に所蔵される鶴翁筆、および鶴翁筆の可能性が高い作品四点を紹介したい。まず一点目は、鶴翁の落款・印章が捺される六曲一隻の蘭竹菊・葡萄図押絵貼屏風(図3)である。竹、蘭、葡萄、菊を描く六図からなり、「養老山陰鶴翁亮」などの落款が記されている。右から数えて第二扇目には「養老山陰八十二齡 鶴翁亮」とあり、鶴翁が八十二歳のときに描かれた作品であることがわかる。これは弘化二年(一八四五)にあたる。鶴翁は弘化四年

(一八四七)に没しているので晩年の作ということになる。

この押絵貼屏風が描かれた翌年の弘化三年(一八四六)に描かれたと考えられるのが、「龍・墨梅図衝立」(図4)である。一面には龍図が、もう一面には梅図が描かれた衝立一基である。それぞれに落款・印章があり、龍図には、「八十有三鶴翁亮」、梅図には「八十三齡鶴翁亮」とあることから、鶴翁八十三歳にあたる弘化三年(一八四六)に描かれたことがわかる。梅のモチーフは鶴翁の師・鶴洲が描いた「梅に叭々鳥図」、「梅に小禽図」(いずれも神戸市立博物館所蔵)に例があり、鶴洲から学んだと思われる。

一方の龍は南蘋派で描かれる例があまりなく、花鳥図襖絵における松の描写と同様、龍の描き方も他の画派から学んだのではないだろうか。狩野派等の他派による絵画の摸写等によって学んだのか、あるいは、直接師事して学んだのかは不明であるが、鶴洲が没したのは享和三年(一八〇三)で、鶴翁が没したのは弘化四年(一八四七)であることを考えると、師が没した後、四〇年余の間に、別の画派から学んだとしても不思議はない。

残る二点は鶴翁の落款・印章はないものの、鶴翁筆の可能性が高い作品である。ひとつは「芭蕉に群鶴図」襖二面である。金箔を散らした背景に、芭蕉を墨で描き、手前に鶴の群れを着彩で描いた作品である。鶴翁や鶴洲が鶴を描いた例は他の確認できないが、細部にわたる濃密な描き方から、鶴翁筆の可能性が考えられる。また、同じく落款・印章はないものの、板戸二面に「墨竹図」(図5)が描かれている。まるで箒を逆さにしたかのような大胆な形象と、竹の節を円で表現する墨竹図は、鶴翁筆「月下墨竹図」(図6)(岐阜

市歴史博物館所蔵)に非常に近似している。岐阜市歴史博物館の墨竹図には「八十三齡鶴翁亮」の落款があり、衝立と同じ弘化三年(一八四六)に描かれたことがわかる。この板戸も晩年に描かれたものであると考えられる。この筈のような墨竹図は、黒田泊庵筆「一竿掃天図」にも例がある。黒田泊庵は一説に鶴亭に学んだとあり、鶴亭からこのような墨竹図を学んで描いていたとすれば、鶴洲を経て鶴翁が同様の墨竹図を描くことも考えられる。

白水氏は、鶴洲ら南蘋派はその後、岐阜で巻き起った南画に吸収されていったと結論づけており、筆者もその意見に賛同する。しかしながら、鶴洲が岐阜に伝えた南蘋派の技法は大きく二つに分類できるのではないだろうか。ひとつは細密な描写を特徴とする濃密な着色画であり、もうひとつは、墨で竹や蘭などを描く、文人画に近い描き方による墨画である。後者は、南画と共通する部分があり、また会得するのも比較的容易であったため、その後の南画ブームに乗り、吸収されていったと考えられる。一方の鮮やかな着色画はどこにいったのだろうか。

三、鶴嶠による襖絵

ここで着目したいのは、岐阜市長良の某寺に所蔵される襖絵六面(図7)である。「籬に菊・秋海棠図」二面、「太湖石・牡丹に雉図」二面、「柳・菊に鶏図」の二面で、いずれも金箔地に着色で描かれる。なお、これら襖絵六面を含めた鶴洲・鶴翁・鶴嶠作品については表(資料1)にまとめた。

「籬に菊・秋海棠図」には落款があり、「甲午秋日 鶴嶠山人写」と読める。また、「鶴嶠」朱文方印も捺されている。「岐阜県 日本

画郷土作家・画人名簿」(昭和五十五年「一九八〇」、美濃南画会)によれば、鶴嶠は養老郡高田の人で、師は鶴翁だという。「鶴」の字を受け継ぐことや、比較的鮮やかな色彩を使用して細密な描写を試みている画風から考えても、鶴嶠を鶴翁の流れをくむ画家と位置付けることに無理はない。鶴翁の弟子だとすると、甲午は天保五年(一八三四)、鶴翁の在世にあたる。ただし、「籬に菊・秋海棠図」は、狩野派でよく描かれる画題であり、南蘋派とも言い切れない、不思議な様式となっている。鶴嶠は南蘋派と狩野派両方の影響を受けた画家といえるのではないだろうか。ここで生まれる推測は、鶴嶠は鶴翁と狩野派の画家両方に学んだか、あるいは、鶴翁が景陽寺に遣した襖絵には南蘋派以外の描き方も読み取れることから、鶴翁がすでに他の画派から技法を何らかの方法で学びとっており、その画法を鶴嶠へ伝えたとも考えうる。

ただし、鶴嶠の「籬に菊・秋海棠図」を見る限り、独学で学んだとは考えづらい。他の地域で鶴翁あるいは鶴嶠が狩野派の画家に直接学んだか、狩野派を学んだ他の絵師が岐阜に滞在し、その際に狩野派の技法を学んだとも考えられる。

また、景陽寺と某寺の二寺院の襖絵について着目してきたが、これらの二寺院のみ襖に絵が描かれていたとは考えづらく、それらの襖絵を描くために、幾人かの画家が他の地方より岐阜に滞在していたか、岐阜出身の画家がいたとしても不思議はない。これまで岐阜では南蘋派と南画が盛んであったことが知られていたが、岐阜の絵

画制作の活動はもつと裾野が広がったのではないだろうか。

おわりに

江戸時代中期に一世を風靡した南蘋派は、京坂地方で活躍した鶴亭に学んだ山田鶴洲によって岐阜へもたらされた。山田鶴洲は多くの弟子を抱え、中でも三人の高弟・矢島鶴仙、日比野鶴翁、松波鶴山の作品が確認されている。これまで、鶴洲とその一門の意義は、当時最新の南蘋派の画風を美濃地方に広め、十八世紀から十九世紀にかけて、プロからアマチュアまでを含む、この地域の庶民に依るはじめての絵画活動を起こしたことにあり、その後、南蘋派の活動は後の南画の隆盛の中で吸収されたと考えられてきた。

本稿では、日比野鶴翁作品とその弟子と目される鶴嶠作品の調査・分析から、山田鶴洲によってもたらされた南蘋派の画法は大きく二つに分類され、文人画（南画）に共通する部分の多い水墨画技法は南画へと吸収され、もうひとつの濃彩で細密に描く着色画技法については、他の画派による技法（おそらく狩野派）を吸収しながら鶴翁、鶴嶠へ細々とながらも受け継がれていったと考える。鶴嶠の生没年は不明だが、天保年間の襖絵が遺されていることや鶴翁の弟子であることからおそらく活躍期は江戸時代後期から幕末にかけてであろう。鶴嶠にも弟子がいたとすれば、近代以降にも影響を与えたことになる。

岐阜で絵画といえば南蘋派と南画に限定されがちであったが、江戸時代、今回とりあげた二寺院以外にも何らかの絵画は描かれてい

たはずであり、岐阜における絵画界には、まだ知られていない事も多いのではないだろうか。

資料 1

鶴洲・鶴翁・鶴嶠関連作品

筆者	作品名	制作年	所蔵	員数	主な掲載文献
山田鶴洲	花鳥図	寛政九年（1797）	岐阜市歴史博物館	一双	『館蔵品図録絵画Ⅰ南蘋派・南画派』
山田鶴洲	百花園		岐阜市歴史博物館	三帖	岐阜市歴史博物館紀要 13
山田鶴洲	松下仙人図	天明二年（1782）	岐阜市歴史博物館	一幅	『館蔵品図録絵画Ⅰ南蘋派・南画派』
山田鶴洲	木蓮に白鷗図	寛政十年（1798）	岐阜市歴史博物館	一幅	『館蔵品図録絵画Ⅰ南蘋派・南画派』
山田鶴洲	梅に叭々鳥図	安永九年（1780）	神戸市立博物館	一幅	『若芝と鶴亭』展図録
山田鶴洲	梅に小禽図		神戸市立博物館	一幅	『若芝と鶴亭』展図録
山田鶴洲	仏手柑に綬帯鳥図		神戸市立博物館	一幅	『若芝と鶴亭』展図録
山田鶴洲	唐子布袋図	天明元年（1781）	円照寺		岐阜市歴史博物館紀要 13
日比野鶴翁	仏手柑に綬帯鳥図	文政八年（1825）	岐阜市歴史博物館	一幅	『館蔵品図録絵画Ⅰ南蘋派・南画派』
日比野鶴翁	月下墨竹図	弘化三年（1846）	岐阜市歴史博物館	一幅	
日比野鶴翁	蘭竹菊・葡萄押絵貼屏風	弘化二年（1845）	景陽寺	六曲一隻	
日比野鶴翁	龍・墨梅図衝立	弘化三年（1846）	景陽寺	一基	
日比野鶴翁	花鳥図襖		景陽寺	八面	
日比野鶴翁カ	墨竹図（板戸）		景陽寺	二面	
日比野鶴翁カ	芭蕉に群鶴図		景陽寺	二面	
鶴嶠	籬に菊・秋海棠図襖	天保五年（1834）	某寺	二面	
鶴嶠	太湖石・牡丹に雉図襖	天保五年（1834）	某寺	二面	
鶴嶠	柳・菊に鶏図襖	天保五年（1834）	某寺	二面	

註

- (1) 宮島新一「三都における南蘋画風の流传」『大和文華』七三号 一九八五年。
 (2) 白水正「美濃の南蘋派―鶴洲とその一門」『岐阜市歴史博物館研究紀要』第十三号、一九九九年。
 (3) 「鶴洲墓碑文」（白水氏前掲註（2）論文）
 鶴洲居士碑 平安 畑維龍銘并序
 居士諱善農字登毅岐阜人氏族本山田有故冒張氏号鶴洲性嗜画年甫八歳見鶴亭
 禪師墨竹甚喜之不舍欲親就其人学画謀之于父母父母以其幼不許後切請遊鶴亭
 之門父母遂許之師始在江都後掛錫于浪華益相親炙焉雖其躬迫頽齡不変師法在
 其郷也以画授門生甚多有請画者則録其名氏応其需終身不蓄妻妾平素断葷肉慕
 王右丞之風愛林和靖之友年少而為孤在家幹蠱于兄氏其弟元長遊京師学医于先
 子之門自帰其郷与仲氏侍養其母氏兄弟友愛兄善画弟善詩篋篋相娛居士壯年祝
 髮即□鶴亭禪師之衣鉢居恒煇依普神觀音大士距岐阜十里而北有長滝観音毎月
 住賽之拈香火不懈意街上兒童皆識其面其為人澹白無所嗜但嗜画已享和癸亥冬
 十二月七日病没享年五十九没後家無
 長物褥上留丹青具耳元長具其状属余求
 銘乃紀之為銘曰

山含丹抹 水施緑烟 幽而克貞
 温而克堅 斯人遊戯 維画維禪
 神不滅 蛻骨化仙

文化七年歳在庚午暮秋之初

鷺山 僧一円、高田 日比野亮、加納 松波邦章、笠松 田中欽若、揖斐
 松井宗朋、大桑 横山世年、笠松 内藤元葆、揖斐 野田忠永、長良 大野
 道常、岐阜 加野知雄、同前 日比野芳秀、日置江 青木公達、各方諸生
 右 弟子等喜捨建之 祠堂財寄付

- (4) 昭和三十五年五月一日指定。

- (5) 第一扇 蘭

「養老山陰鶴翁亮」「日亮」白文方印「公明」白文方印「鶴翁」朱文方印

第二扇 葡萄図

「養老山陰八十二齡 鶴翁亮」「景亮之印」白文方印「鶴翁」朱文方印

第三扇 菊図

「八十 八十二齡鶴翁亮」「景亮之印」白文方印「鶴翁」朱文方印

第四扇 竹図

「鶴翁亮」「景亮之印」白文方印「鶴翁」朱文方印

第五扇 菊図

「鶴翁山人亮」「景亮之印」白文方印「鶴翁」朱文方印

第六扇 竹図

「日亮」白文方印「鶴翁」朱文方印

(6) 『神戸・淡路・鳴門近世の画家たち』(神戸市立博物館、一九九八年)掲載。

〔附記〕

本稿は平成二十三年(二〇一一)六月に岐阜市歴史博物館での特集陳列「岐阜の南蘋派絵画」(平成二十三年六月二十四日―七月二十四日)と、期間中に行った土曜講座「岐阜と南蘋派の花鳥画」の内容をもとに大幅に加筆修正をおこなったものです。貴重なご寺宝の調査および本稿への掲載の許可を賜りました景陽寺、岐阜市長良の某寺の皆様、および展示準備の際にご助言を賜りました犬山城白帝文庫主任学芸員白水正氏、岐阜市歴史博物館学芸員稲川由利子氏に心より感謝します。

木下明日香(きのした・あすか)

二〇〇六年 神戸大学文学部卒業

二〇〇八年 神戸大学文学研究科修士課程修了

二〇〇八年 神戸大学大学院人文科学研究科博士課程後期課程社会動態専攻入学

二〇一〇年 岐阜市歴史博物館学芸員

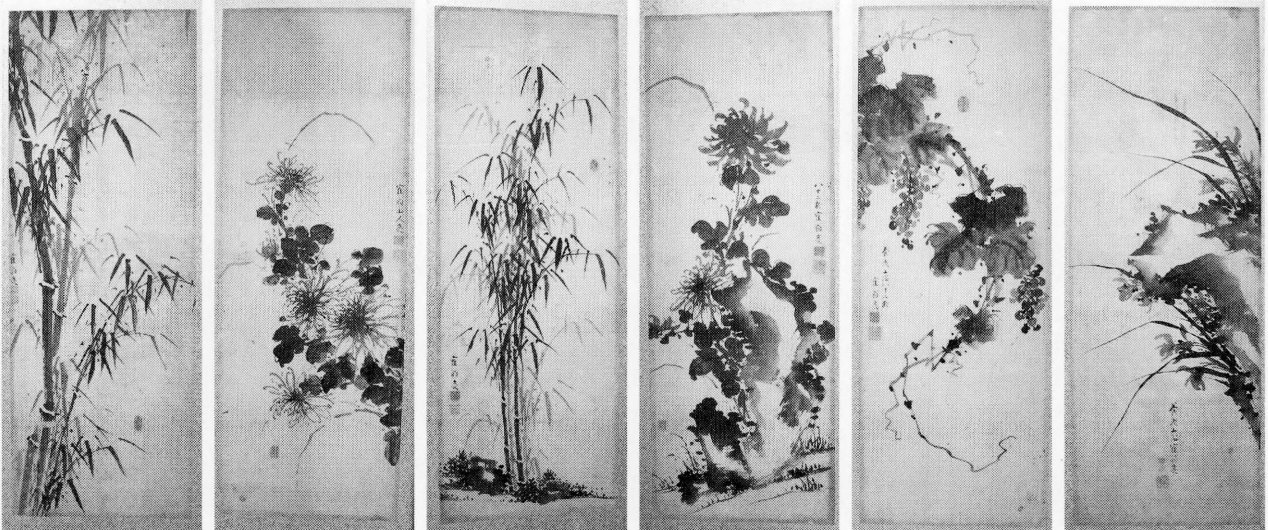
二〇一二年 茶道資料館学芸員



図2 日比野鶴翁筆「仏手柑に綬帯鳥図」
(岐阜市歴史博物館所蔵)



図1 日比野鶴翁筆「花鳥図襖」八面 (景陽寺所蔵)



第六扇

第五扇

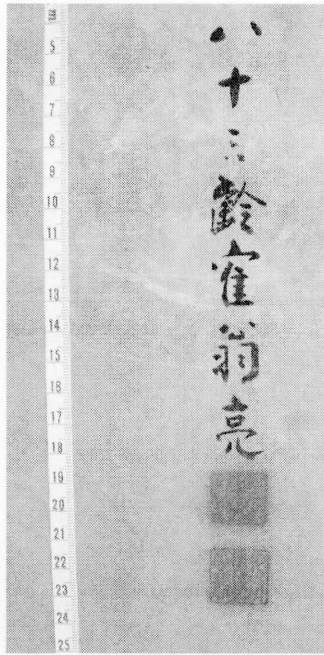
第四扇

第三扇

第二扇

第一扇

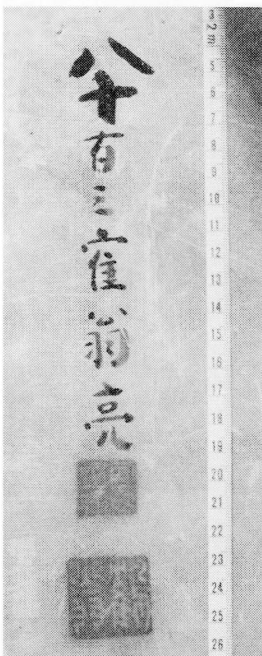
図3 日比野鶴翁筆「蘭竹菊・葡萄図押絵貼屏風」(景陽寺所蔵)



墨梅図・落款部分



「龍・墨梅図衝立」のうち「梅図」



龍図・落款部分



「龍・墨梅図衝立」のうち「龍図」

■ 図 4 ■

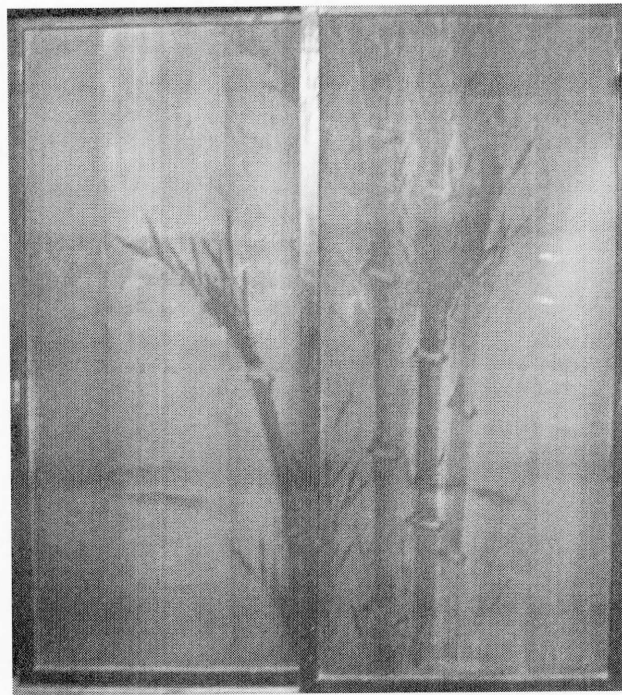


图5 「墨竹圖」(板戸二面) (景陽寺所藏)



落款部分



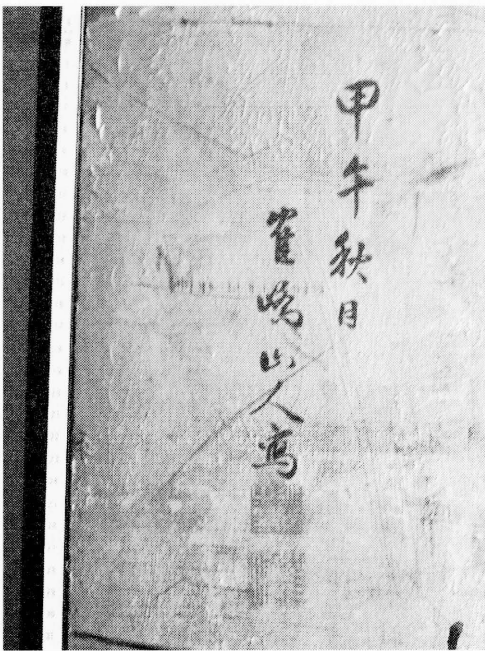
图6 鶴翁筆「月下墨竹圖」(岐阜市歴史博物館所藏)



「籬に菊・秋海棠図」二面



「柳・菊に鶏図」二面



「籬に菊・秋海棠図」落款部分



「太湖石・牡丹に雉図」二面

図7